

もう一人のモーガン ; Lewis Henry Morgan と *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* の中の先住民 *

和 栗 了

Mark Twain は Lewis Henry Morgan (1818-81) の著作に触発されて *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889 年出版、以後 *Yankee* と略す) を書いた。そして Twain が Lewis Morgan の *The League of the Ho-dé-no-sau-nee, or Iroquois* (1851 年出版) か *Ancient Society* (1877 年出版、以後 *Ancient* と略す) などに刺激されながら *Yankee* を書いたとすれば、この小説は Twain の先住民観を表現するだけでなく、19 世紀後半に勃興してきた民族学 (ethnology) や民俗学 (folklore)、文化人類学 (cultural anthropology) に対する Twain の関心をも示すことになる。

Yankee の主な語り手は Hank Morgan だが、この Morgan は Lewis Morgan の Morgan なのではないか、という疑問がこの論の出発点である。Hank Morgan という名前は、John Pierpont Morgan (1837-1919) を連想させる。¹あるいは John Hunt Morgan (1826-64) を連想する読者もいるだろうし、それ以外の何かを示唆しているのかもしれない。

ただ、*Yankee* には Lewis Morgan の *Ancient* などを念頭に置いて書いたと考えられる部分がある。そしてこの作品がアメリカ先住民を描いたと直観させる個所は随所にある。ここでは Lewis Morgan の理論と Hank Morgan の物語とを比較検討しながら、Twain の先住民観を論ずる。

まず、Lewis Morgan と Hank Morgan とは考え方から活動に至るまで実によく似ている。Lewis Morgan の代表作は *Ancient* であり、これが Hank Morgan の「著作」*Yankee* と似ている。これら二つの作品の大枠の類似点から論ずる。

どちらの作品でも、ある意味でアメリカ合衆国を代表する人物が、古代あるいはそう思われている社会の中に進入する。Lewis Morgan は東部の由緒ある家庭に生まれ育ち、弁護士になり、New York 州選出の上院議員になっている。一方 Hank は Colt の兵器工場の監督に成り上がった人物だが、彼自身が言うように、Hank のような成り上がり者は合衆国の東部にはどこにでもいたのである。二人は代表の仕方が多少異なるが、ともにアメリカ社会を代表する人物と言える。

二人の類似点についてもう少し詳しく見ると、Lewis Morgan は生粋の New England 出身と言える人物だ。彼の父方の先祖は 1636 年に Massachusetts に入植した。母方は 1641 年に Massachusetts に入植した John Steele が先祖である。Lewis Morgan は従姉妹の Mary Elizabeth Steele と 1851 年に結婚した。この女性も John Steele の子孫だった。つまり彼は *Yankee* 中の *Yankee* と言ってよい。Twain が “First Families of Virginia” の子孫であることにこだわっていたことを連想させる話だ。Lewis Morgan の血筋の良さが血筋のはっきりしない Hank Morgan を Twain に創造させたと言えるだろう。Hank は先祖のことを語らないが、“I was born and reared in Hartford, in the State of Connecticut … So I am a Yankee of the Yankees—and practical” (*Yankee*, 4) と自己規定している。彼の父親は鍛冶屋 (blacksmith) だったと語る。血筋の違いはあるが、Lewis Morgan と Hank Morgan とが生粋の New England 人であることは偶然の一致ではない。

二人が紛れ込んだ社会は古代あるいは古代のような社会であった。Lewis Morgan は Iroquois 族の人々との生活体験をもとに *Ancient* を書いた。そして、

Iroquois 族は、古代・中世・近代という時代区分の中で、古代に属すると Lewis Morgan は主張している。だからこそ *Ancient Society* と題名をつけたのである。Hank が紛れ込んだ 6 世紀の King Arthur の国は全くの古代社会であった。

Ancient と *Yankee* とに話を戻せば、二つの作品ともに場所の移動と人類史上の移動とが平行になっている。Lewis Morgan が西に移動し先住民の社会の中に入っていくと、その移動がまるで彼が人類の歴史の上を遡って行くかのように書かれている。一方 Hank は合衆国からブリテン島へと東に移動し、1300 年の時間を遡る。19 世紀半ばのアメリカ大陸を西へ移動することは時代を遡るような感覚を抱かせることになることを、Twain は *Roughing It* (1872 年出版) の中で示した。*Yankee* では東に移動することで時代を遡るという皮肉を利かせたのである。もちろん、イギリスに対する皮肉である。

歴史の流れについて Hank が極めて興味深い発言をしている。彼は、Arthur 王宮で王と同等以上の権威ある地位に着くと、“I stood here, at the very spring and source of the second great period of the world's history” (*Yankee*, 63) と自負している。ここで彼が何の脈絡もなく言及する “the second great period” とは、Lewis Morgan の文明の進歩に関する理論の用語と考えられる。

ここで、Lewis Morgan の人類史に関する理論を概略する必要がある。彼の理論の根底には、人間社会は「野蛮段階」(“savagery”) から「未開段階」(“barbarism”) を経て「文明段階」(“civilization”) へと進歩するという信念があった。Lewis Morgan は “period” (「段階」) という語を多用しながら、² *Ancient* の “Preface” で次のようにまとめている：

It can now be asserted upon convincing evidence that savagery preceded barbarism in all the tribes of mankind, as barbarism is known to have preceded civilization. The history of the human race is one in source, one in experience, and one in progress. (Ancient, xxix-xxx)

「新大陸」にやって来た白人達は当然文明段階にあり、そこに居た先住民を文明化しつつあると Lewis Morgan は主張する。ただし、彼は先住民達を軽蔑しているのではない。先住民達は自分達の文明より低い段階にあるけれども進歩の途上にあると彼は認めているのである。さらに、人類の進歩の形態はみな同じであり、どの文化圏もどの民族も必ず野蛮状態、未開状態、文明状態という3段階を経験すると Lewis Morgan は主張する。そして、古代ギリシアも古代ローマも、世界を主導するようになった19世紀末のアメリカ合衆国も、一直線上の進歩の過程でつながっていると言うのだ。近代西洋のひとつの淵源である古代ギリシアと古代ローマの文明もこの過程の一部であったと主張することで、19世紀後半のアメリカ合衆国の文明がまるでそれらの正統な継承者であるかのように議論している。Lewis Morgan の明解な、しかしながら独善的な文明論である。

Ancient を読んだ読者には、Hank が言及する “the second great period of the world’s history” が Lewis Morgan の主張する「未開段階」(“barbarism”) のことだとすぐに理解できる。彼によると、この段階の文明は、動物の飼育、灌漑技術による穀類の栽培、鉄器の使用を主な特徴とする。文字はまだ一般には使用されていない。³

これはまさに Hank が描く6世紀の Arthur 王国の状況に一致している。6世紀の世界では豚が飼育され、明らかに麦が栽培され、ジャガイモや玉葱に関する Arthur 王の話があり、騎士達は鉄の鎧兜を常に身に着けている。そして Hank が何度も繰り返して文字を教えたにもかかわらず、6世紀の人々の間には一般に文字は普及せず、識字能力は主に教会関係者に限られていた。Lewis Morgan の理論では文字は「文明段階」で一般化すると述べられている。

さらに、Hank は6世紀の人々を何度も動物にたとえている。その意味は、Hank が来る以前の6世紀の世界は Lewis Morgan の主張する野蛮段階の後期から未開段階初期、つまり人々が文字を持たない動物とあまり変わらない状態にあることを示すものだと考えられる。6世紀の人々を動物だと指弾しつつ、Hank は次のようにアメリカ先住民が動物に似ていると主張する：

On their journeys those Britons were used to long fasts, and knew how to bear them; and also how to freight-up against probable fasts before starting, after the style of the Indian and the anaconda. (*Yankee*, 108-9)

Hank の中では6世紀の人々とアメリカ先住民とが同じように動物のようだと見える時があったのである。そして野蛮段階から未開段階に移行しつつあった6世紀の世界、いわば動物的世界を自分が文明段階へと大きく一步進展させるのだと Hank は気負っているのだ。彼の気負いあるいは傲慢さに、Lewis Morgan の独善性と類似するものを看てとる読者もいるだろう。

Twain は Lewis Morgan と彼の著作に刺激を受けて Hank Morgan を創造し、*Ancient* を批判しようとしたことは明らかだ。Twain は Lewis Morgan によく似た Hank Morgan を創りだした。そして彼には必ずしも肯定できない人物の Hank が「文明化」を推し進め、失敗する小説を書くことで、Twain は Lewis Morgan に異を唱え、Lewis Morgan もやがて失敗すると予言したかったのだ。

2

二人がいかに似ていても、Lewis Morgan と Hank Morgan とは「古代」の人々に対して強烈な偏見を抱いているかどうかで決定的に異なる。言うまでもなく、Lewis Morgan は Iroquois 族の人々に対する偏見など微塵も表現していない。彼は Iroquois 族の社会や習慣に対して客観的な姿勢を保っている。Iroquois の社会組織や他の部族との関係、しきたり、家の形態、命名法などを網羅的に調査し、記述し、理論化している。先住民達が貧困に喘ぐことはなかった、と少し褒めすぎだと解釈すべき点があったり、平等を強調しすぎている点があったりするが、*Ancient* はかなり正確に先住民族のことを観察した本である。カール・マルクス (Karl Heinrich Marx, 1818-1883) に強い影響を与えたと言われるのも当然だと考えられるほど、当時としては科学的客観性を獲得している。

Lewis Morgan が先住民に不利な発言をしているとすれば、先住民には土地を私有するという意識が薄かったことを指摘する点くらいである。⁴ いずれにせよ、Lewis Morgan の著書はどれも客観的で好意的な先住民族観察記録であり、それゆえに彼の著作からは具体的な個人の姿が伝わってこないのである。彼が収集したものは、先住民族の衣装や生活用具や戦争に関するものであった。Hank の物語とは違い、Lewis Morgan の著作には Iroquois 族の女性と恋に落ちたことも書いてなければ、ずっと自分に悪意を抱き続けた魔術師がいた、とも書いてないのだ。

これに対し、*Yankee* の面白さは語り手の強烈な偏見にある。あるいは Hank という人物の面白さである。自分は *Yankee* 中の *Yankee* で情感など解しないと自己規定していること自体、彼が複雑な性格を内包する人物だ。Hank は自らをそう規定しなければならないほど奥深いものを持つ人物なのである。6 世紀にタイムスリップしたとわかると、1300 年も進んだ世界から来たのだから自分は 6 世紀の人々よりも圧倒的に優れている、従って自分は 6 世紀の人々を支配できると Hank は思い込む。さらに彼は自由と平等という概念を 6 世紀に持ち込むこと、6 世紀の世界を「文明化」すること、科学技術によって近代化することが、6 世紀の人々を幸福にすることだと信じ込んでいる。まったく一方的で独善的な考えだ。

このような偏見を持つ人物の観察眼は当然偏向しているのだが、ある程度のものは Hank にも見えている。その一つは、6 世紀の人々も偏った考えを持っていると Hank が発見したことである。例えば、6 世紀の騎士達は自分達の地位の象徴である鎧兜を頑として脱ごうとしない。Hank は鎧兜も身に着けずに馬上槍試合で投げ縄と拳銃とはったりで騎士達を打ち負かす。彼は野球を導入することで馬上槍試合の時代を終わらせたつもりだったが、騎士達は鉄の鎧兜を着たままで野球をするのだ。しかも自分達より身分の低い者が審判をすると騎士達はその判定に従わず、審判を殺してしまう。最終的に騎士達は Sir Launcelot 側と King Arthur 側とに分かれて戦い、滅亡していくことになる。Hank の教育や政策によっても 6 世紀の騎士達は変わらないのである。

6 世紀の人々の頑なさを Clarence が語っている。Clarence は Hank の最大の理解者であり愛弟子だったが、Hank の計画に時々甚大な影響を与える。Hank 以上に 6 世紀の人々を理解している Clarence は物語の最後で Hank に 6 世紀の人々の迷信深さを説く：

“When those knights come, those establishments will empty themselves and go over to the enemy. Did you think you had educated the superstition out of those people?”

“I certainly did think it.”

“Well, then, you may unthink it. They stood every strain easily—until the Interdict. Since then, they merely put on a bold outside—at heart they are quaking. Make up your mind to it—when the armies come, the mask will fall… Smart as you are, the Church was smarter.”

(*Yankee*, 418-9)

Clarence が 6 世紀の人々と Hank の両者を十分理解し、しかも Hank に忠誠を誓っているらしい点から考えると、Clarence の上の発言は Hank を陥れようとしているとは解釈しにくい。むしろ Hank が明確に認識しなかったことを Clarence ははっきりと口に出しているのである。その意味で Clarence は Hank の物語の助演者と言える。そして Hank が明確に認識しなかったことは、一度擦り込まれた考えを人間が払拭するのは困難だという事実だ。騎士達は最後まで騎士達なのである。

一方、6 世紀の民衆も頑固に貴族達を崇拝し続ける。民衆は思考や意志を持たない動物のように貴族達のために生き、貴族達のために死んでいくのである。詳述するまでもなく、飼い馴らされた動物同様の存在が 6 世紀の民衆なのである。

Lewis Morgan の *Ancient* と Hank Morgan の物語とを比較すると、Twain の意図は人間を描くことにあったと気付かされる。Lewis Morgan は理論化された明晰な観察に基づく社会理論を著した。Iroquois 族の個人の名前の命名法

も家族関係も彼の理論によって容易に理解できる。Iroquois 族の政治形態が合衆国の政治形態に影響したのかもしれない。彼の研究は客観的で科学的だとみなされていたに違いない。だが、彼の著作には具体的な人間の姿も個人の感情も表現されていない。これに対して Hank の物語では Hank がどのような人物か簡単にわかる。彼は、傲慢で、自己顕示欲と正義感が強く、感傷的で矛盾に満ちた人物だ。彼が Sandy とふたりだけで遍歴の旅に出ることになると、Hank はその不道德性を主張する。Hank が彼女と親密な関係になったのは遍歴の旅の途中だったに違いない。だとすれば、Hank は不道德な行為が行われることを期待しながらそれを指弾したのだ。彼は実に愉快な人物であり、19 世紀後半の、愛すべき典型的アメリカの労働者と言ってよい。

19 世紀のアメリカ合衆国の先進文明を代表すると自負する Hank Morgan も 6 世紀の人々も固定観念に縛られていた。Hank は自分があらゆる点で 6 世紀の人々よりも優れていると過信し、自由と平等と民主主義こそ人々を幸福にすると信じ込んでいる。同じように、6 世紀の騎士達は地位と権力の象徴である鉄の鎧兜を脱ごうとはしない。民衆達は貴族達が生まれながらに優れているという信念を持ち続けている。人々の肌に染み込み、血管の中を流れるようになったものは取り除けないと Twain は言いたいのだ。Hank の “Inherited ideas are a curious thing, and interesting to observe and examine. I had mine, the king and his people had theirs.” (*Yankee*, 65) という発言は当を得ている。どのような白人もその心の根底にアメリカ先住民に対する偏見や先入観を持っており、それを持っていないかのように自己表現することは不正直で非人間的だと Twain は主張したいのだ。彼は、*Yankee* で人々の凝り固まった偏見や先入観や信念を描くことで、人間社会の形態に関する理論ではなく、人間の本質の一端を描いているのだ。

3

個人の存在の根底にあって、相互に理解し合えないものがあるからといって、

Hank Morgan はあるべき人間の姿を見失ってはいない。Hank は 6 世紀の支配者も被支配者も動物状態にあるとみなしている。だが、Hank は自分も人間ではないと理解している。彼は自分が 6 世紀の人々から巨大な象だと見なされているという：

Well, to the king, the nobles, and all the nation, down to the very slaves and tramps, I was just that kind of an elephant, and nothing more. I was admired, also feared; but it was as an animal is admired and feared.

(*Yankee*, 65)

Hank はこの後も自分が最大の動物の象だという発言を何度も繰り返している。彼は自分が人間ではないと認識しているのだ。彼の自己否定は 6 世紀では絶対的存在と思われていた Hank が相対的存在にしかすぎないことを暴露することになり、ほとんど逆転とも言える変化である。

逆説的な表現方法を好んだ Mark Twain は、*Yankee* で動物のような人間しか登場させずに人間社会の非道な現実を描き、あるべき人間の姿を模索するという手法を採った。6 世紀の支配者達も被支配者達も動物と変わらず、19 世紀のアメリカも 6 世紀の世界と大して変わらない非人間的状態にあることを示した。そして最終的に 19 世紀のアメリカ合衆国の文明を代表する人物が大量殺戮を犯すという物語を通して、Twain は人間の社会が 1300 年の間に大して良くならなかったことを示そうとする。良くななかったどころか、一度に殺害した人々の数だけから考えれば、25000 人という桁外れの殺人を犯したのは「進歩」したはずの文明の代表者 Hank だったのである。人類はむしろ残虐化した。6 世紀の人々も 19 世紀の人々もあるべき人間の姿から遠く隔たった動物でしかなかったのである。そして Hank はあるべき人間の姿を知りながらも自らを最大の動物の象としか主張できなかったのである。Hank の失敗が示すものは、アメリカ先住民を「野蛮段階」にあると言うのなら彼らを大量殺戮した白人はより野蛮だという事実であり、Hank の矛盾が示すものは、何の先入観もわだ

かまりも持たずにアメリカ先住民に接することはできないという現実である。

人間の根底にあるものは何か、という問題は Twain を生涯悩ませ続けた。その一例として、ある閉鎖的な社会で生まれ育った人々が共通に持つ凝り固まった考えがあることを Twain は見抜いていた。*Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (1894 年出版) では、Dawson's Landing の人々は誰一人として奴隷制度を否定しない。Roxana はその非道性に気付くが、一時的覚醒に終わってしまう。*The Innocents Abroad* (1869 年出版) では、語り手が訪問する旧大陸のそれぞれの国の持つ価値観と当時のアメリカ人が持っていた微妙な劣等感が衝突している。ロシア皇帝アレクサンドル 2 世の前ではほとんどのアメリカ人は緊張か嫌悪のどちらかを感じていた。虚心にアレクサンドル 2 世に面会したのは Mary Mason Fairbanks だけだったと Twain は語る。そして先入観に支配された共同体社会にゆさぶりをかけるのは何れの場合でも stranger であった。⁵ *Yankee* では、6 世紀の人々を見下しながらも文明化しようとする Hank という stranger が、どうしても鎧兜を脱がない騎士達と衝突するという形で、ふたつの共同体社会が持つ偏見が表現されていた。

Lewis Morgan が先住民社会の研究をいかに客観的で公平に行おうとしても、彼も凝り固まった考えを持っていた。彼は人間社会が進歩するという信念にとりつかれていた。アメリカ合衆国の東部の白人文明が最も進歩した文明段階にあることを信じて疑わなかった。そして進歩した自分たち白人が先住民を導いてやらねばならないという義務感を抱いていた。一夫一婦制と定住生活がより進んだ文明段階なのだから、先住民を定住させ夫婦中心の家庭観を先住民に持たさせねばならないと Lewis Morgan は主張した。もちろん彼は先住民達を父親のように保護した。だが、Twain は Lewis Morgan が見せる耐えられないほどに patronizing な態度を鋭く感じ取っていたのである。Twain は Lewis Morgan の盲目的な独善性に辟易していたのだ。Twain は Lewis Morgan の優等生ぶりが気に入らなかったに違いない。そしてもう一人の Morgan を創造し、矛盾と偏見に満ちた物語を語らせることで、痛烈にそして見事に Lewis Morgan を批判したのである。

Mark Twain も Lewis Morgan もアメリカ先住民を描いた。Hank Morgan は6世紀の人々を “so their philosophical bearing is not an outcome of mental training, intellectual fortitude, reasoning; it is mere animal training; they are white Indians” (*Yankee*, 20) と軽蔑した。“white Indians” という直喩は、先住民達は動物だという意味だ。アメリカ先住民を6世紀のイギリスの人々に見立て、東部のヤンキーの視点から見て書いたのが Mark Twain の *Yankee* なのである。Lewis Morgan のあまりに patronizing な先住民観に耐えられなかった Twain は、Hank Morgan の強烈な先入観を Arthur 王宮の人々の思考の根底にあるものに衝突させたのだ。

だがその衝突は上下関係での衝突ではなく、同じ動物同士の衝突だと Hank は認識している。だからこそ *Yankee* という小説は人間の姿を深いところから描いているのだ。Twain が Hank Morgan の名前に込めたものは深かったのである。

* この論文は日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム「フォークロアの想像力の戦略」(1997年12月6日、於甲南大学)で、「巨[虚]像[象]の崩壊」と題した口頭発表原稿を大幅に書き換えたものである。

Works Cited and Consulted

- Morgan, Lewis. *Ancient Society*. Tucson, Arizona: The University of Arizona Press, 1985. 本文中でこの本からの引用は題名を *Ancient* と略記し、ページ番号を付した。
- . *The Indian Journals, 1859-62*. New York: Dover Publications, Inc., 1993.
- . *League of the Iroquois*. New York: Citadel Press, 1984.

-----, 『古代社会』, 青山道夫訳, 東京: 岩波文庫, 1958 年.

-----, 『アメリカ先住民のすまい』, 上田篤監修, 古代社会研究会訳, 東京: 岩波文庫, 1990 年.

Mark Twain. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. Stein, Bernard L. ed. Berkeley, California: University of California Press, 1983. 本文中
でこの本からの引用は題名を *Yankee* と略記し、ページ番号を付した。

-----, *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. Berger, Sidney E. ed. New York: W. W. Norton, 1980.

-----, *Roughing It*. Harriet Elinor Smith and Edgar Marquess Branch eds. Berkeley, California: University of California Press, 1993.

Rusmussen, R. Kent. *Critical Companion to Mark Twain, Volume II*. New York: Facts on File, 2007.

Tooker, Elisabeth. *Lewis H. Morgan on Iroquois Material Culture*. Tucson, Arizona: The University of Arizona Press, 1994.

Waguri, Ryo. *Mark Twain and Strangers*. Tokyo: Eiho-sha, 2004.

注

1 Rusmussen は, "Because of his great organizational talent and his Hartford origins, [John Pierpont] Morgan is generally considered a possible source for Hank Morgan's name in *Connecticut Yankee*." (Rusmussen, 799) と述べている。

2 例えば, Lewis Morgan は次のように "period" という語を多用する:

The period of savagery, of the early part of which very little is known, may be divided, provisionally, into three sub-periods. These may be named respectively the *Older*, the *Middle*, and the *Later* period of savagery; and the condition of society in each, respectively, may be distinguished as the *Lower*, the *Middle*, and the *Upper Status* of savagery. (*Ancient*, 9)

3 Lewis Morgan は "Upper Status of Barbarism" の特徴を次のようにまとめている:

It commenced with the domestication of animals in the Eastern hemisphere, and in the Western with cultivation by irrigation and with use of adobe-brick and stone in architecture, as shown. Its termination may be fixed with the invention of the smelting iron ore...

It commenced with the manufacture of iron, and ended with the invention of a phonetic alphabet, and the use of writing in literary composition. Here civilization begins. This leaves in the Upper Status, for example, the Grecian tribes of the Homeric age, the Italian tribes shortly before the founding of Rome, and the Germanic tribes of the time of Caesar. (*Ancient*, 11)

- 4 Iroquois 族の領土観について Lewis Morgan は次のように述べている：

Their territory consisted of the area of their actual settlements, and so much of the surrounding region as the tribe ranged over in hunting and fishing, and were able to defend against the encroachments of other tribes... The country thus imperfectly defined, whether large or small, was the domain of the tribe, recognized as such by other tribes, and defended as such by themselves. (*Ancient*, 112)

- 5 Waguri, Ryo, *Mark Twain and Strangers* 参照。

